

21世紀における力強い歩みを

京都大学名誉教授 芦 田 和 男

21世紀幕あけの記念すべき年に、防災研究所は創立50周年を迎え、新しい一步を踏み出すことになりました。この間、多くの方々の努力で大きな成果をあげ、国内外から高い評価を受けていることをまずお喜び申し上げます。

私もこのすばらしい研究所に30年間在職させていただき、何がしかの仕事をさせていただいたことを感謝しております。

この50周年という節目の年に、半世紀にわたる研究の歴史を振り返り、また、社会の現状と将来を展望して、今後どのように発展して行くべきかを探し求めることは極めて大切であると思われまふ。

従来培われてきたいい伝統は守りながら新しい環境に対応するように変革して行くことが必要でしょう。

この問題について、私はアメリカのオハイオ川流域水質管理委員会(ORSANCO)の50周年記念式典に参加する機会があり、感銘を受けましたので、少し述べさせていただきます。

ORSANCOはオハイオ川の水質保全と流域管理について大変伝統のある委員会であり、行政、学者、NGO等を巻き込み、極めて活発な調査研究や事業を展開しており、国際ライン汚染防止委員会とともに世界的にも良く知られています。

私が関係している琵琶湖・淀川水質保全機構とORSANCOとの技術交流協定を50周年記念式典の中で締結するという事で参加したものです。

式典の中では、いろいろな演出がなされておりましたが、彼等は歴史を大変大切に、今までORSANCOの事業に貢献して来た人に大いなる敬意を表していたのには、意外な一面を見たような気がしました。

さて、次の日からORSANCOは、今後の50年に向けて何をなすべきかについてのシンポジウムがありました。水質保全、流域管理の問題では、多くの分野が関係しますので、分野別に数多くの部屋に分かれて議論が展開されました。どんな議論をしているのか、2、3の部屋を覗いてみましたが、参加者全員が極めて活発に意見を述べ、議長がたくみにそれらを裁きながら、千差万別の意見を集約し、それらを全体として調整してORSANCOの今後の研究課題、取り組みの体制等に関する提言としてまとめておりました。これらの議論は極めてオープンな形で進められ、かつ、参加者全員が納得するようにして結論を導いておりました。このような議論の進め方やそれらを集約するやり方は、日本人はあまり上手ではありません。どうしてもあらかじめ筋書きを作っておいて、それに頼ろうとする傾向があります。

しかし、これからは多様な価値観を持った人々が参加して会議を行い、一定の結論を導かなければならない場合が増えてくるでしょう。こうした場合には、あらかじめ作っておいた筋書きどおりには行かず、その場その場の議論の展開を見ながら結論を導き出すことが必要とならまふでしょう。それについては、アメリカ人のやり方には見習うべき所が多いように思いました。また、それを可能にするためには、広い視野と柔軟な発想が必要であり、また、日頃から訓練をしておくことが大切であると思いました。

防災研究所とORSANCOでは、その目的や環境も異なりますので同じようには行きませんが、衆知を集めて今後どのような方向に発展して行くべきかについての見通しを立てていただきたいものです。

20世紀には、人類史上かつて経験したことのないような異常な人口増加と科学技術を基礎とした文明の発展によ

り、生活は便利になってきましたが、反面、地球環境の問題を生じ、このままではこの文明を持続させることは難しいという危機に至ったのが現在です。

また、国際化の波が押し寄せ、我が国の固有なシステムとの間にいろいろと摩擦が生じています。このような状況の中で、現在、我が国はすべての分野において大きな変革の波の中にあります。大学においても例外ではありません。学問領域の再編、学問の大衆化と大学の役割、国立大学のエージェンシー化など、様々な問題が出ています。防災研究所の皆様も、大学における学問や研究のあり方、さらに防災研究所のあり方などについて熱心に討議したり、自ら考えたりなさっていることと思います。この件に関して一言述べさせていただきます。

学問の出発点は、人間の知的好奇心、あるいは未知なるものへの挑戦の心であることは言うまでもありません。それは本来、個人にそなわっているものであり、したがって、何を研究するかは、なに人にも支配されない個人の自由に属する問題であり、尊重されなければならない事です。しかし、実際には、個人の社会的立場により、その行動は実質的に拘束されます。

防災研究所に属する者は、災害から人間や国土を守ることを目標として研究しており、そのためにはどんなテーマが重要かをいろいろと考えることは当然です。したがって、研究テーマは、個人の興味と社会的ニーズの両面から決まることになるでしょう。ここで問題になるのは社会的ニーズです。

アンケートなどで社会的ニーズを調べることがあります。その場合、多くの人は自分の経験や見聞に基づいて判断しますので、答えも大体予想されますし、行政などですでに取り上げていることが多いものがほとんどでしょう。勿論、そのような課題の中にも未解明の問題も数多くありますので、そうした社会的ニーズに応えることも大切です。

しかし、災害研究の分野においては社会的ニーズとして顕在化していないが、実は重要な問題が多々あります。例えば、巨大災害や環境変化による災害は発生する前は経験していませんから、社会的ニーズとはなりにくいものです。こうした問題を発掘して、予見的立場から研究を行い、その成果を広く知らせて社会的ニーズとしていくことこそ、大学で行うべき研究テーマとしてふさわしいのではないかと思います。このようなテーマの発掘には、自然に対する深い認識や豊かなイメージ発想力が求められます。また、それを解決するためには、広い知識が必要になるでしょう。

防災研究所の皆様方が、防災に関する顕在的、潜在的ニーズに応え、国内のみならず、国際的にも指導的な研究所として21世紀を力強く歩んでいかれることを心から願っております。